

豊庄だより

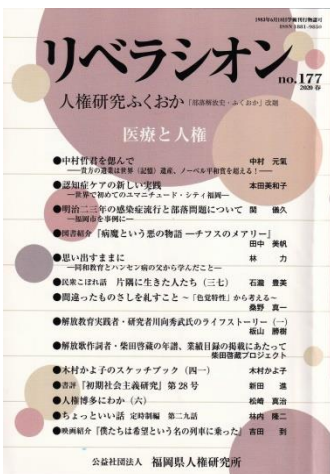


第 617 号 2020 年 6 月 8 日

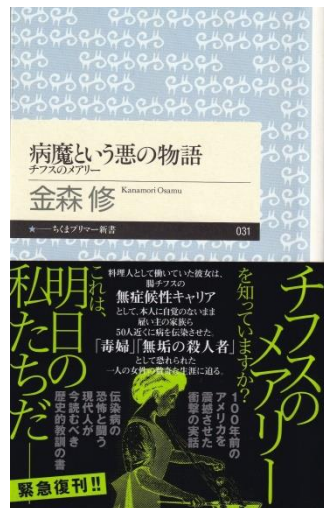
福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

「学校感染 どう向き合う」。西日本新聞（2020 年 6 月 3 日）の 1 面の見出しでした。北九州市では 5 月 28 日から 6 月 2 日までに、小学校 3 校、中学校 2 校で計 12 人の児童生徒の感染が確認されました。その中にはクラスメート同士で感染したと見られるケースも含まれていました。また、その多くが「無症状」であるため、今後の感染の拡大が心配されています。

「無症状」が招いた感染といえば、「チフスのメアリー」のことを思い出しました。今から約 110 年ほど前のアメリカで、ある料理の得意な「健康」な女性が、自覚なき腸チフスの感染源（健康保菌者）として隔離され、訴訟を起こし、世間の注目を集めました。女性の名は、メアリー・マローン（1869～1938）といい、1883 年、10 代でアイルランドからアメリカへ移住し、ニューヨーク近郊で住み込みの賄い婦として、いくつかの裕福な家庭で働いていました。彼女は料理が上手なだけでなく、子どもの面倒見もよかったです。1900 年から 1907 年にかけて、彼女が働いた 8 つの家族のうち、7 つの家族から 22 人の腸チフス患者が出たのです。この当時、ニューヨーク市だけでも毎年 3000 から 4000 人の腸チフス患者が出ており、この 22 人の患者とメアリーを結びつけるのは根拠に乏しかったのですが、調査の依頼を受けた衛生工学の専門家、ジョージ・ソーパーは、メアリーを訪ね、事情を説明し、検査のため、大便、小便、血液のサンプルをもらえないかと頼みました。しかし、メアリーは、自分は一度も腸チフスを発症したことがない「健康体」であり、自分が周囲に病気を撒き散らしている可能性があるとはにわかに信じられず、依頼者を激しく追い払いました。その後、彼女は警察の手によって取り押さえられ、力づくで救急車に押し込まれ、伝染病の専門病院へ運ばれました。そこで検査された結果は、本人はいたって健康だったにもかかわらず、高濃度の腸チフス菌が検出されたのです。この検査結果を受けて、メアリーはニューヨークのイースト川に浮かぶ直径 500 メートルほどのノース・ブラザー島にあるリヴァーサイド病院に隔離されました。島に隔離されたメアリーは約 2 年間で 163 の大便が採取され、そのうち 120 個が陽性、残りの 43 個は陰性でした。そこで、メアリーは検査の信頼性が低いと感じ、解放を求めて訴訟を起こしました。様々な議論がかわされましたが、1910 年 2 月、「今後料理をしない」という誓約書を書かせた上で解放されました。当初は彼女の居所は把握されていたのですが、4 年後には消息不明となりました。それから 5 年後の 1915 年 1 月、ニューヨークの病院で腸チフスの集団発生が起こり、25 人の患者のうち 2 人が死亡しました。この病院に偽名を使って働いていたメアリーがいたのです。彼女は拘束され、再びノース・ブラザー島に送られ、亡くなるまで 23 年間をその島で過ごしました。



現在のコロナ禍の中で、このメアリーのことから何を学ぶべきか？すぐに答えは出ないのですが、一つは、「無症状」の感染症に対して、私たちはどのように対処すべきかということ。もう一つは、メアリーが置かれていた境遇に関してですが、移住のきっかけになったのはアイルランドの飢饉です。アメリカに来て生活は苦しく、不衛生な環境の中で過ごさなければならず、感染症は弱い部分に大きな影響を及ぼすということは現代もメアリーの時代と同じだと思いました。※私が「メアリー」のことを知ったのは、「リベラシオン」177 号（福岡県人権研究所）を読んでからです。そこで紹介されていた（長く廃版になっていた）『病魔という悪の物語』（ちくまプリマー新書）が最近復刊されました。



現在のコロナ禍の中で、このメアリーのことから何を学ぶべきか？すぐに答えは出ないのですが、一つは、「無症状」の感染症に対して、私たちはどのように対処すべきかということ。もう一つは、メアリーが置かれていた境遇に関してですが、移住のきっかけになったのはアイルランドの飢饉です。アメリカに来て生活は苦しく、不衛生な環境の中で過ごさなければならず、感染症は弱い部分に大きな影響を及ぼすということは現代もメアリーの時代と同じだと思いました。※私が「メアリー」のことを知ったのは、「リベラシオン」177 号（福岡県人権研究所）を読んでからです。そこで紹介されていた（長く廃版になっていた）『病魔という悪の物語』（ちくまプリマー新書）が最近復刊されました。

現在のコロナ禍の中で、このメアリーのことから何を学ぶべきか？すぐに答えは出ないのですが、一つは、「無症状」の感染症に対して、私たちはどのように対処すべきかということ。もう一つは、メアリーが置かれていた境遇に関してですが、移住のきっかけになったのはアイルランドの飢饉です。アメリカに来て生活は苦しく、不衛生な環境の中で過ごさなければならず、感染症は弱い部分に大きな影響を及ぼすということは現代もメアリーの時代と同じだと思いました。※私が「メアリー」のことを知ったのは、「リベラシオン」177 号（福岡県人権研究所）を読んでからです。そこで紹介されていた（長く廃版になっていた）『病魔という悪の物語』（ちくまプリマー新書）が最近復刊されました。